

多田海庵の海防意識

——幕末の〈実務家〉としての儒者の一事例——

横 山 俊一郎

Tada Kaian's Awareness of Coastal Defense

— One of Jusha as practical persons at the end of Edo period —

YOKOYAMA Shunichiro

This paper takes a Jusha in Hakuen Shoin. Tada Kaian was one of the leading students in Hakuen Shoin. He was active as a practical person in many spheres at the end of Edo period. This paper analyzes what characteristics he had in those days and his proposals—especially the coastal defense. He made his suggestions actively to Edo Shogunate, the Imperial court and Izushi clan. He tried to promote the industries in the border area from the motives of defense against the powerful Western nations. He was clearly different from previous ordinary Jusha and loyalists to the Emperor. His proposals shows he was not only scholar but also an engineer.

キーワード：儒者、多田海庵、実務家、海防問題、殖産事業、泊園書院

はじめに

本稿では、儒教と政策との親和性如何という問題を念頭に置きつつ、武士身分出身の学者、但馬国出石藩士多田海庵という人物を考察対象として取り上げたい。後述するように、海庵は幕末の〈実務家〉として、主に国土防衛の周辺分野において活躍したが、同じく武士身分出身の学者でありながら〈実務家〉として位置づけられる人物として、信濃国松代藩士佐久間象山が考えられる¹⁾。また、海庵の修学歴をみると、儒教だけに留まらず、武道、仏教、諸子、蘭学をはじめとした様々な学問体系に触れており、

1) 儒者としてではなく洋学者として象山の政治実践に注目した業績として、矢森小映子「松代藩士佐久間象山の殖産開発事業——松代藩地域研究の視点から——」（『藩地域の政策主体と藩——信濃松代藩地域の研究Ⅱ』、岩田書院、2008年）が挙げられる。また、〈思想家〉もしくは〈実務家〉として儒者を分類する意義については、拙稿「江戸時代後期における〈実務家〉としての儒者——瀬戸内諸藩における懐徳堂学術の受容を中心として——」（『思想史研究』第17号、日本思想史・思想論研究会、2013年）参照。

東洋と西洋の学問を幅広く受容した象山との共通点を見出せる。

しかし、本稿で取り上げる海庵についていえば、私塾泊園書院の都講となったのに加え、出石藩の藩校弘道館の寮長となって「聖人之徳」について議論していたように、一口に学者といっても海庵の場合、その学問の中心に儒教があった可能性が高い。そこで、本稿では、幕末の〈実務家〉としての儒者という観点から、海庵の政治実践に焦点を当て、海庵の現実社会に対する現状認識、とりわけ当時の外交課題に直結する海防意識に接近したい。

1 問題の所在

まず、海庵の政治実践を考察する前に、出石藩の老儒桜井東門の日記を確認したい。日付は、弘化4(1847)年5月27日である。そこで記された内容は、この老儒も通い慣れたであろう藩校弘道館に当時の出石藩主仙石久利を招いた時の出来事である。そこでは、多田海庵(通称:弥太郎)が約三年間の江戸・京坂遊学を終えた後、弘道館の寮長として輪講している様子が伝えられている。日記の文面から、海庵の教説に対して東門がある種の違和感を覚えていることが窺えよう。

早朝用意し五半時前弘道館へ罷出、御締役加藤四郎兵衛・岡部鉄五郎・多田助之丞・小山徳甫罷出、御奉行仙石右馬助殿、御年寄仙石内蔵介殿・磯野六郎次殿御出席、御用人杉原源太左衛門・頭取乗竹弼・岡木極人、四時過御出被遊、如例御小納戸井諒介へ、帰城後初而被為入、恐悦之至、難有奉存候旨申上、御機嫌奉伺候、無程被為召、不相更奉蒙御懇意、夫々御請申上、且今日之御出、格別有かたく奉存候旨申上候、聖殿御拝礼被遊、謙蔵書経請尺、畢而多田弥太郎・森元叔蔵輪講被仰付、兩人共無滞相済退く、

多田弥太郎は三・四ヶ条捨置がたき条有之二付、別席にて夫々教諭いたし置候、能々呑込候様子にて、当人儀、傑出ノ所も有之候へ共、又余り多言にて聖人之徳を議し、先儒を歴詆し、仏を有益トいふ類、夫々ヶ条事繁多故不記取也、此兒、何卒実学ノ徒ニ相成ねハよいがと阿んし過候而右様別席にて段々教諭したし置候、無程殿様御帰被遊、我等如例、御次へ御礼伺罷出候、被為召段々御懇意有之、夫々御請申上退く²⁾、

桜井東門は海庵の義理の祖父に当たる。すなわち、海庵の母の義父が東門であった。桜井家は出石藩の「藩儒の家」であり、海庵は青年期まで藩校弘道館において東門の子桜井石門に学んでいる。この東門が違和感を覚えたのは、孫の海庵が「実学ノ徒」に通じる教説を説いた点にあった。具体的には、聖人の徳をやかましく議論し、次々と先儒をそしめる一方、仏教を有益であると主張したことを指している。ここで、海庵は儒教を基本としながら仏教をも取り入れ、実際に役立つ学問を構築していた可能性が考えられる。

2) 188 (弘道館にて進講、多田弥太郎ら輪講)、「東門日乗」(出石町史編纂委員会編『出石町史』第4巻、1993年)96頁。

次に、東門の略歴を確認したい³⁾。東門は安永5（1776）年に備前国和气郡是里村近藤恒邦の子として生まれている。東門の家族関係については、初め外戚の播磨国赤穂藩儒赤松滄洲の養子となり、のち出石藩儒桜井東亭の娘婿となってその家学を継いでいる。東門の修學歷については、肥後国に遊学して熊本藩の藩校時習館の教授高本紫冥に従学し、次いで京坂に出て、皆川淇園・中井竹山の門に出入りし、さらに江戸に出て佐藤一斎・谷本鬱谷と交友し、頼杏坪が江戸に出るに及んで、杏坪・倉成竜渚・大窪詩仏・菊池立山と「不朽社」を結んで詩文を研修するようになった。のちに帰藩して出石藩の藩校弘道館の教授となり藩士を教導するに至っている。東門が専攻した学派については、初め諸家に入出入りして折衷学を唱えていたが、晩年は宋学を修めるようになっていく。東門は安政3（1856）年に没している。

このように、東門は大坂遊学時に懐徳堂に出入りし、さらに、江戸遊学時に頼杏坪と詩文結社を作っている等、これまで筆者が考察してきた〈実務家〉としての儒者たちと交流している事実が判る⁴⁾。実際、東門は政策実施者として政策現場に配された経験はないものの、藩の重役と親密になって自らの政治意見を表明し、出石藩の財政政策に実質的に関与している⁵⁾。こうした実践的性向は東門の父桜井東亭の経歴では確認できない。

一方、上記の東門の日記では、藩校弘道館の締役として海庵の父多田義徳（通称：助之丞）の名が記されているが、義徳の同僚として加藤四郎兵衛という名も見えている。この四郎兵衛という人物は、後に帝国大学総長となる啓蒙思想家加藤弘之（以下、加藤）の父であった。当時、加藤は出石藩の藩校弘道館で学んでいた。以下、加藤による海庵の人物評を確認したい。

唯一人少し珍しい人が有った。其人は勤王家の一人で、後に但馬の生野の騒動の時には、沢主水正に属して、生野の代官所を襲うた一人の謀主で、其時には死ななかったが其事に由って後に殺されたが近頃従四位を贈られて招魂社にも祀られた人である。其人は多田彌太郎と云ふ人で、初は経之、後には立德と名づけて随分世間にも知られている人物である。中々非凡な人で二十歳以前から国を出て、経学文章の為に随分所々方々を遊歴して、いろいろな先生の門にも這入って東京にも長く修業して居たそうだが、中々奇抜な人物であった。学才もあつた人だが、落付いて学問をすると云う方な性格ではなく始終所々を遊歴した。

そうして、此人が長崎に行つて居た頃、同藩では高嶋四郎太夫などいふ人が、西洋の砲術を伝へる時であつたから多田氏も就て是を習ふた。そして今迄は漢学の書生であつたけれども、長崎で西洋の砲術を習ふてから国に帰つて開かうとした。然し金もなし、又藩には古い流儀の砲術があるから其に邪魔をされる、其処で仕方無い者じゃから什麼工夫したが、木で大砲を拵へた即ち木砲である、大分大きな大砲であつた。其を拵へてから君公に、大砲を撃つ所を見て貰はふと云ふ事を願ふて君

3) 桜井東門の略歴については、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下巻（吉川弘文館、1970年）964頁。

4) 懐徳堂出身者による政治実践については、拙稿「江戸時代後期における〈実務家〉としての儒者——瀬戸内諸藩における懐徳堂學術の受容を中心として——」（『思想史研究』第17号、日本思想史・思想論研究会、2013年）参照。頼杏坪による政治実践については、頼祺一『近世後期朱子学派の研究』（溪水社、1986年）参照。

5) 東門の文政年間における藩政関与については、36（造酒の諮問に答える）、37（造酒に上ヶ米減額を進言）、41（造酒の節儉案文に愾意傍注）、「東門日乗」（出石町史編纂委員会編『出石町史』第4巻、1993年）28,29頁。

公にも許可があつて其大砲を撃った。其頃私はまだ子供であつたが、多田氏は私を愛してくれたから其大砲を試撃する時には、其の門人と言ふ事で大砲を撃つ手伝もした。

私は丁度十四歳の時で、多田氏は二十五歳ゆゑ、私より十一二歳も上の人であつた。此自分から私は西洋の事は大分異つたものじゃと言ふ事に気が付いて、何も知らぬけれども西洋の砲術は、日本の古流とは余程優れて居る、木砲であるから西洋の砲とは違ふ訳ではあるが、是れ位なもので撃つたならば屹と遠距離に行くに違ひない。日本には昔しから石火矢と云ふものがあるけれども、是れは小さなもので、西洋は余程違つたものであると云ふ事は子供心にも浮んだ。其自分は外国は日本に攻めて来るといふ評判の段々立つて来る頃であつた。

一体私の家と云ふのは、曩に言ふた通り甲州流の軍学の師範役をして居る家で、私の親父も其を遣つて居つた。それで「親父も若し西洋が攻めて来ると云ふ日には昔の軍学や砲術では、到底も外国と戦争は出来ない、」と云ふことを知つて居たが私も子供心ではあつたが其多田と云ふ人から、種々の話を聞いたりなどして然ういふ考が浮んで来て、どうかして西洋の事を、委しく学んで見たいと云ふ心があつた⁶⁾。

上記の人物評を見る限り、加藤にとって西洋世界への関心をもたらした人物として海庵が位置づけられており、さらに、加藤は海庵による政治意見の表明の場となつた嘉永2（1849）年の大砲試射に立ち会つていたのである（後述）。しかし、実際には、学問上の交流によって加藤を西洋世界へと導いた人物は海庵だけでなく、その主要人物として先述した象山も含まれている。ただし、藩校弘道館で学んだ加藤はのち、江戸に上り蕃書調所の教授手伝となつて古賀謹堂のもとでドイツ語を学ぶことになるが、海庵はまさにこの謹堂の父に当たる古賀侗庵に学んでいるのである（後述⁷⁾。

以上のように、出石藩における〈実務家〉としての儒者の嚆矢でもある祖父桜井東門が孫の海庵の教説に違和感を覚え、一方、加藤弘之は儒者でないにしても、海庵を通して西洋世界への関心を広げ、さらに海庵と共通した修學歷を歩むのである。したがつて、この東門と加藤の間の世代に位置する多田海庵に注目することは、〈実務家〉としての儒者の近代への連続の様相を考えるうえで何かしら示唆を得られるのではなからうか。

そもそも、海庵の教説に対して東門が違和感を覚えているのは何故であろうか。その疑問に対し、東門と海庵はともに江戸時代後期において〈実務家〉として活躍するのであるが、この両者が直面した社会的課題はそれぞれ異なつており、それゆゑ、その課題解決へと向かわせる思想内容にも大きな差異が生じるに至つたという想定が考えられる。

次章以降、こうした想定を念頭に置きつつ、海庵の前半生および著述・献策を確認し、さらに、献策活動を通して窺われる海庵の政治意見に注目していきたい。

6) 武田芳太郎『但馬志士伝』（兵庫県朝来郡朝来町公民館、1956年）所載「文学博士加藤弘之翁経歴談」

7) ちなみに、古賀家三代（精里・侗庵・謹堂）については、眞壁仁『徳川後期の学問と政治』（名古屋大学出版会、2007年）によって彼らの政治実践とりわけ幕末の幕府外交の変容との関係に関する業績が挙げられる。

2 前半生

本章では、前章で述べた本稿の問題を踏まえ、海庵の前半生を概観したい⁸⁾。

号は海庵、名は初め経之、のち立德。但馬国出石藩士多田義徳の長子として、文政9（1826）年3月27日出石柳町で生まれる。母は出石藩儒桜井東門（通称：良蔵）の養女である。多田家は、義徳の曾祖父義春が正徳年間に仙石家に出仕して以来の家であり、代々「弥太郎」「助之丞」と称している。ちなみに、桜井良蔵という名が見える「御侍帳」によると、多田助之丞の知行は「五十俵五人扶持」、役付は「普請奉行」である⁹⁾。

海庵は出石藩の藩校弘道館で桜井石門に学び、天保14（1843）年大坂泊園書院の藤澤東暎の門に入り、その都講となっている¹⁰⁾。のち大坂城南の日蓮宗雲雷寺に寓し、諸子・百家・仏家・諸宗の書を渉獵している。弘化元（1844）8月江戸の昌平坂学問所に入り古賀侗庵に学んだが、ことに頼三樹三郎と交流している。

三樹三郎は頼山陽の子であり、海庵の一歳年長の文政8（1825）年生まれである。天保11（1841）年大坂の後藤松隠の塾に入り、その傍ら篠崎小竹に学んだが、海庵が江戸に遊学する前年、来坂した羽倉簡堂に伴われて江戸に遊学し、昌平坂学問所に入寮している。弘化3（1846）年には東北漫遊の旅に出掛けており、そこから蝦夷地に渡っている。嘉永6（1853）年のペリー来航に対しては、皇国の安危にかかわると憤り、安政5（1858）年將軍継嗣問題には徳川斉昭の子一橋慶喜の擁立を画策し、同年4月梁川星巖と謀議して、水戸藩に勅書が降下することを近衛忠熙に説いた。同年8月水戸藩に戊午の密勅が降下すると、幕府は安政の大獄を起し、同年11月三樹三郎もこれに連座し、翌安政6（1859）年斬首されるに至った。

江戸遊学を果たした海庵は、次に下野国烏山藩士小川某に甲越軍法を学んだが、弘化2（1845）年10月には京都に遊学し、古義堂の伊藤東峰に学んでいる。古義堂は伊藤仁斎が寛文2（1662）年に創立した私塾である。宝永2（1705）年仁斎の跡を長男東涯が継ぎ、東涯が元文元（1736）年に没したのち、三男東所がまだ幼かったので、東涯の末弟蘭嶠が塾をあずかり、東所が成長した後にその跡を継いだ。この頃までが古義堂の最盛期とされる。その後文化元（1804）年に東所が没し、長男東里（文化元年——14年塾主）、東所七男東峰（文化14年——弘化2年塾主）、東峰三男翰斎（弘化2年——明治40年塾主）が次々と継いだ。目立った著述を残していない。海庵が古義堂に入塾した時期は、最盛期から約四十

8) 海庵の事蹟については、『出石町史』の他、その典拠とされる伝記として、小島功一編『王政維新』（田中宋栄堂、1891年）、干河岸貫一編『近世百傑伝』（博文堂、1900年）、山方香峰編『近世人傑伝』（実業之日本社、1907年）、藤澤南岳編『菁莪録』（1913年）、田尻佐編『贈位諸賢伝』（近藤出版社、旧1927年、増1975年）が挙げられる。しかし、海庵の著述・献策の時期および名称については、武田芳太郎『但馬志士伝』（兵庫県朝来郡朝来町公民館、1956年）が最も詳しい。『菁莪録』は吾妻重二『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）に影印されている。藤澤東暎の門人の略伝を収めたものであり、大正2（1913）年に東暎の子藤澤南岳が編纂している。

9) 25「御侍帳」（出石町史編纂委員会編『出石町史』第3巻、1987年）322～346頁。

10) ちなみに、『菁莪録』（1913年）では、海庵の入門時期は「弘化元（1844）年甲辰」と記されている。

年が経過した六代塾主東峰の在任最後の年に当たる。

さらに、海庵は翌弘化3（1846）年5月、京都の順正書院で新宮涼庭に学んでいる¹¹⁾。

新宮涼庭は蘭方医であり、医師の子である。初め伯父有馬涼築について医事・経書を学び、文化元（1804）年故郷丹後で漢方医として開業した。文化10（1813）年になると長崎に行き、吉雄如淵らの通詞に師事し、オランダ商館長ドゥーフに認められて商館付医師に就いている。文政2（1819）年に京都で開業し、西洋医学を流行させるに至る。天保10（1839）年南禅寺畔に順正書院を創建し、八学科を設けて系統的な医学教育を行なった。経済の才にも長じており、南部藩の財政改革に寄与した経験を持っている。

海庵はこうして約三年間の江戸・京坂遊学を終え、故郷出石に帰り、弘化3（1846）年7月、藩校弘道館の寮長となっている。また、翌弘化4（1847）年6月になると、馬廻席に列せられた。しかし、嘉永元（1848）年正月海庵はまたしても長崎へと遊学し、高島秋帆の高弟大木藤十郎に砲術を学んでいる。

海庵が孫弟子に当たる秋帆は、寛政10（1798）年長崎町年寄高島四郎兵衛の三男として生まれた¹²⁾。二十三歳の時に長崎に留学した藤澤東咳は、四郎兵衛宅に寄宿して少年時代の秋帆を三年間教えている。したがって、秋帆は東咳最早期の弟子の一人に数えられる。秋帆は長崎港の防備を担当した関係で、はじめ荻野流砲術を学んだが、後に出島の蘭人から西洋砲術を学び、これを高島流砲術と呼んだ。これは西洋近代砲術をわが国に最初に紹介したものといえる。天保11（1840）年9月になると、秋帆は幕府に上書して、アヘン戦争の戦況を伝え、清国側の敗北を砲術の未熟に帰して、西洋砲術の採用による武備の強化を進言している。翌天保12（1841）年の秋帆所持の輸入砲の実射と歩騎兵の演練により、幕府は高島流砲術を採用し、代官江川英竜に砲術の伝授を命じるに至った。幕府について諸藩が広く高島流砲術を採用するのはこれ以来のことである。しかし、他方、高島流砲術の隆盛は、幕府内部の守旧派の忌むところとなり、秋帆は天保13（1842）年10月に逮捕され、弘化3年（1846）7月に中追放の判決を受け、武蔵国岡部藩に預けられている。したがって、海庵が長崎に遊学した嘉永元（1848）年時点では、秋帆は長崎にいなかったことになる。

海庵はのちに長崎を去り、小倉藩にて砲術を実験し、帰途各地を遊歴して砲術を講じている。帰藩すると、藩主仙石久利へ西洋流の大砲試射を願い出、それが許されて嘉永2（1849）年10月には出石城外で砲術を試みている。それに際し、近隣の豊岡・宮津・田辺はもとより、鳥取藩士も見物人となった。そののち、海庵は旧来の古流を伝授する藩内の砲術師範からの反発を受け、工夫して造った新砲を藩主久利に献上しようとするものの、嘉永6（1853）年に新たに小倉藩の年寄となった堀鯉助の手によって遮られている。

11) 順正書院については、鄧洪波「京都順正書院初探」（吾妻重二編『泊園記念会創立五十周年記念論文集』、関西大学東西学術研究所、2011年）225～264頁参照。『菁莪録』（1913年）によると、順正書院の院主新宮涼庭の養子新宮涼介は、まさに海庵が順正書院に入塾した弘化3（1846）年に泊園書院に入塾している。

12) 『菁莪録』（1913年）では、その先頭に秋帆の略伝が記されている。

3 著述と献策

前章において海庵と交友関係にあった頼三樹三郎が、嘉永6（1853）年のペリー来航を契機として国事に奔走するようになったのと同様に、海庵は万延元（1854）年3月になると、故郷出石を出奔して江戸に向かい、出石藩主仙石家と親戚関係にあった豊後国岡藩主中川久昭の屋敷へと駆け込み、当時ともに出石藩の年寄であった堀新九郎・鯉助父子の施政糾弾の上書を提出している。

それ以来、軍事技術の提案に限られていた海庵の政治意見の表明が、質・量ともに発展・拡大し、出身藩の出石藩だけでなく幕府および朝廷をも含めた三つの行政機構を通して、その政治意思の具現化が目指されるようになっていく。この堀父子糾弾の一件により、海庵は万延元（1854）年6月に江戸で入獄を命じられるが、同年8月になると故郷出石に移され、のちに自宅幽閉となってそれ以降著述活動に専念するようになる。

そこで、獄中およびその前後の海庵による著述・献策の詳細が窺える『但馬志士伝』（1956年）をもとに、先述した多方面に展開する海庵の政治意見の表明が、どのように実施されたのかについて、海庵による著述活動および献策活動の両者の関係から確認したい。以下、著述・献策の完成および提出年次の早い順に並べている¹³⁾。ちなみに、■印は著述の題名、○印は献策の事蹟を示している。

- 嘉永6（1853）年 海防雜議、報国十議
- 万延元（1854）年 赤心密奏、時務略等
- 安政2（1855）年 内言
- 安政3（1856）年 關蝦夷策、操練略識、火器図識、達徳精義等
- 安政4（1857）年 時務略外書、海防雜議、關蝦夷策の書を「水戸老公」に上る
- 安政4（1857）年 三器衍義
- 安政5（1858）年 機密封事、続機密封事、馭戎明弁等
- 安政6（1859）年 馭戎三鑑、皇国大典、管見鈔、時務閑話等
- 万延元（1860）年 天機点識鈔、萬国一覽等
- 文久元（1861）年 蝦夷同度考、人種移殖考等
- 文久2（1862）年 「焉主世子政固公」に遠望十策を上書す
- 文久3（1863）年 「姉小路少将」に撰海防禦意見書を上る

13) 献策の事蹟については、献策先に無事に届けられたものに限り、海庵による政治意見の表明がなされたものと見做して挙げている。安政元（1854）年の堀父子施政糾弾の上書に関しては、それ以降の海庵による過激なまでの政治運動の出発点となったが、特定の政治勢力の排除が主目的であり、具体的な政策提言にまで踏み込んでいない。著述の題名については、海庵の撰述は上記の他、大道一覽、国体一覽、正学心鑑、地球小識、明鏡照魔録、淫祠通考、修身録、安民六議、禁錮始末、責難諫草、耕雲秘策、機事貴密、詩文草稿、火技伝習録、上水戸老公封事、遠遊紀行、海庵私譜、天祐録、書灰雜書、観劇小史等、40部余りがあったとされている（題名の誤字・脱字については、『成仁集』の緒言を参照して訂正した箇所がある）。

上記3件の献策の事蹟から、その献策先に注目すると、それぞれ、幕府・出石藩・朝廷の三つの行政機構に自らの政治意見を表明したものと見える（後述）。これらの意見書の内容分析に加え、その献策前後で書かれた著述の題名を確認すれば、海庵における政治意見の表明が質・量ともに発展・拡大していく様子が理解されよう¹⁴⁾。

では、問題となる意見書の内容分析に入る前に、上記3件の献策先である「水戸老公」・「焉主世子政固公」・「姉小路少将」の略歴から、海庵の献策を受け取った彼らの当時の地位・役職に注目し、海庵による献策活動の社会的位置づけを確認したい。

また、補足であるが、海庵は朝廷に自らの政治意見を表明する場合、上記の「姉小路少将」と同時並行して「学習院」という教育機関をその献策先として利用している（後述）。したがって、「水戸老公」・「焉主世子政固公」・「姉小路少将」の当時の地位・役職に加えて、「学習院」の成立・変遷から、当時の機能に注目したい。

「水戸老公」（徳川齊昭）

生没年：寛政12（1800）年～万延元（1860）年 役職：海防・政務参与
歴史上著名な人物のため略歴は省略する。

「焉主世子政固公」（土岐鋭雄¹⁵⁾）〔後の仙石政固〕

生没年：天保14（1843）年～大正6（1917）年 地位：藩主の養嗣子候補

鋭雄は第七代出石藩主仙石久利の兄土岐政賢の長男として生まれている。政賢は第六代出石藩主仙石政美が嗣子なく没した時、病弱の理由をもって養子候補から除かれた人物である。藩主久利は安政年間に鋭雄を正式に養子にする意向を示したとされ、実際、久利の内命を受け、文久2（1862）年11月に年寄仙石織人以下十人を自宅に監禁するように命じ、同時に投獄されていた海庵の赦免を宣告する等、出石藩政を主導する人物の一人となっている。その間、堀新九郎・鯉助父子を失脚させて切腹に追い込んでいる。維新後の明治3（1870）年正式に家督を相続して出石藩知事となり、仙石政固と改名するに至っている。

「姉小路少将」（姉小路公知¹⁶⁾）

生没年：天保10（1839）年～文久3（1863）年 役職：国事参政

公知は幼い頃から三条実美と親交があり、実美とともに少壮尊攘派公家として、次第に志士から

14) 海庵の意見書および著書は、海庵が生野の変で遭難したことに加え、維新後の明治9（1876）年出石市街大火によって、その殆どを焼失する事態となった。しかし、これらの災難を逃れた意見書および著書を海庵の子多田信が『成仁集』第一編および第二編として編纂している（多田信は第十編まで編纂するつもりであったが、現在確認できるのは第一編および第二編だけである）。本稿では、『成仁集』第二編に所収されている意見書および著書を使用して海庵の政治意見を分析している。

15) 土岐鋭雄の略歴については、『出石町史』第1巻（出石町史編纂委員会編、1984年）845,846頁。

16) 姉小路公知の略歴については、『国史大辞典』第1巻（吉川弘文館、1979年）254頁。

瞩目されるようになった。文久2（1862）年8月実美ら十二人と連署して、和宮降嫁に尽力した岩倉具視らを弾劾するに至っている。同年9月には実美を正使、公知を副使とする攘夷別勅使に任ぜられ、將軍家茂に攘夷督促と親兵設置の勅旨を伝宣し、同年12月になると国事御用掛に補され、翌文久3（1863）年2月国事参政に転じている。同年3月には、孝明天皇の攘夷祈願のための賀茂社行幸に、4月には石清水社行幸に供奉している。同月摂海防衛巡検の朝命を受け、長州藩士ら七十余人を大坂に下り、軍艦奉行並勝海舟より摂海防禦を聞き、かつ順動丸に乗って兵庫沿海を巡視して帰京したが、御所から退出する際、刺客三人に襲われ暗殺されている。

「学習院¹⁷⁾」 機能：尊攘派の公家・志士の政治的集会場

幕末、京都に設けられた公家の学校である。関白鷹司政道らの工策で幕府当局の了解を得られ、弘化3（1846）年京都御所建春門外の開明門院跡に講堂が竣工し、翌弘化4（1847）年3月開講している。聴講者は堂上・非蔵人の子弟であった。文久年間（1861～1864）に尊攘激派が台頭し、国事御用掛などが設けられた際、ここが政治的集会場となり、高杉晋作・真木和泉らが学習院御用掛となって攘夷決行の策謀が行われている。

4 徳川斉昭への献策

まず、幕府に自らの政治意見を表明したのとして、海庵が安政4（1857）年に徳川斉昭に献策した意見書を取り上げたい。海庵が斉昭に上書したのは、「時務略外書」、「海防雜議」、「關蝦夷策」の三つの著書である。しかし、生野の変による海庵自身の遭難や維新後の出石市街の火災により、これら全てを焼失したらしい。したがって、今日において完全な形でその全貌を把握することはできない。

以下、海庵の子信の説明文を読めば、次に取り上げる「關蝦夷策條目」の全文から、そのうち「關蝦夷策」の概要を掴むことができると判断されよう。

先人遺著ノ關蝦夷ニ関スルハ關蝦夷策蝦夷同度考等ノ書アリ其要略ハ左ニ記載スル所ノ條目ニ於テ見ルヘキナリ

不肖信識

關蝦夷策條目

關蝦夷策別冊認置候得共冗長ニ涉リ候故巨細之議論ハ口達ニ譲リ條目丈抜取左ニ相認候

- 一 ①蝦夷海漁獵並往來運漕之諸用相達候様〔I〕愚考之輸柱船製造御試相願度奉存候事
- 一 御開荒爲手始日本地之人氣引寄候様第一名号正敷仕度蝦夷地一体北海道ト御改号國名村名此迄之唱之文字ニ御引換夫々御選号相成仕度存候事
- 一 蝦夷地一体諸大名へ任願而御分配日本地ヨリ銘々人種募寄追々培植開墾仕候様被仰付度事
- 一 信上越羽海岸無之諸大名へ蝦夷地警衛被仰付番城等追々屯田土着之姿ニ相成其邊爲城地被成下

17) 学習院の成立・変遷については、『国史大辞典』第3巻（吉川弘文館、1983年）186,187頁。

開墾被仰付度事

- 一 奥羽三越海岸受之諸大名へ蝦夷地番兵應援ノ手當被仰付此又援兵ノ手筈急速間ニ合候様番城造築其邊爲城地被成下開墾相兼屯田ノ姿ニ相成候様被仰付度事
- 一 松前地〔Ⅳ〕北極出地四拾貳度清朝順天府ノ北ノ氣候ニ相當且松前ヨリ東北二百里アツケシ邊ニハ自然生ノ粟稗等モ有之趣彼是相考候へハ四拾四五度迄ノ處随分開墾モ可相成ト存候併開墾前當分ノ處ハ此迄松前家仕來ノ通山海ノ漁獵へ夫々算當米酒諸品等此方ヨリ令交易番兵并土人共扶助介抱被仰付其内追々御世話有之墾田仕候様御仕向被爲在度事
- 一 開墾前土人漁獵ノ品交易ノ處置松前家仕來ノ通取計可申候共在番并分配ノ諸大名右利益ニ泥ミ却而蝦夷地開墾ノ本意取失候テハ如何ニ付此段可然被仰出惣而開墾ノ諸費費爲手當前廉ヨリ追々相貯候様仕度就テハ②産業之利益三ツ分ノ割合ニ御仕組一分ハ分配ノ國元へ爲運上金収納一分ハ彼地産業交易ノ諸入用ト相定支配ノ長役ハ被任置一分ハ支配下ノ人種銘々ノ得分ト相極右三分共開墾ノ入用金夫々割合除置候様仕候事
- 一 分配ノ諸大名ヨリ爲地資之租税土産又ハ運上金等相當ノ割合員數相定公儀へ上納被仰付候へハ右運上ノ多少ニ依而開墾ノ精粗モ相分御開荒御引立ノ機要共可相成存候事
- 一 前條三分ノ内ヨリ爲除金貯置候品相應餘慶有之候へハ人種培植田面開墾ノ人夫養育ノ元手ト仕右人夫へ申付畑面荒起不寄何品勝手次第植付開發右畑面檢地租税盛付ノ大畧此迄松前家ニテ一坪ニ錢貳文一反ニ錢六百元ノ租税差出候割合ニ準而盛付候様仕度事
- 一 荒起之畑面大抵一人前何程ト地所配當ノ員數ニ定次第ニ地味モ宜敷相成候へハ畑作ノ穀種等蒔試追々田面ニ仕立候様御世話有之五ヶ年毎ニ檢地相改相應租税相増候様仕度事
- 一 支配ノ長役ハ不及申③爲開墾日本地ヨリ招寄候人種並土人ノ内頭立重立候者共孰レモ士分農兵ノ姿ニ取立産業ハ一概不限農作漁獵工商ノ差別無之其志ニ任而申付候様仕度事
- 一 田面開墾ノ正味ハ無之候共其身銘々ノ志願ニ任セテ地面一町ヨリ數十町數百町分配ノ書付相渡或ハ千石百石五十石等大抵其身ノ心柄身柄ニ應而書付相渡開墾次第右可令知行之旨申渡候ハ、屹度引立ニモ相成候歟ト存込候事
- 一 右申渡五ヶ年之間ニ開墾取掛候際モ不相見候へハ右書付取上別人ニ相渡候様仕度事
- 一 ④頭立重立候土人へ此迄隨身之面々ハ足輕中間等之格ニ取立右長役之者ヨリ表立相改夫々分附惣テ家人ノ姿ニ取計申度事
- 一 此上開墾等際立得益ノ模様ニ寄右⑤頭立重立候者共へ〔Ⅱ〕愚考ノ新砲一挺宛令製造一ヶ年ニ一度宛廣野ニ於テ令集會操練等相試防禦之儀心懸候様仕度事
- 一 右⑥新砲ニテ陸戰ノ操練相試候上猶蓄財ノ餘慶モ有之候へハ數輩組合〔Ⅲ〕愚考ノ砲船令製造海軍ノ操練相試候様仕度但右砲種ハ鑄造料餘程相懸候儀ニテ割合差出候様可仕事
- 一 ⑦初ヶ條申立候輪柱船モ此又大割合ニ懸テ費目差出一湊ニ二三艘宛ハ製造漁獵軍用相兼具貯仕度存候事
- 一 培植ノ人種壯年無妻ノ者無之惣テ鰥寡孤獨ノ者無之様精々世話有之婚娶等ノ儀支配長役ヨリ頭々申談爲致世話人種繁榮仕候様引立申度ト存候事
- 一 支配長役ノ居館并支配下ノ屋敷等港々へ城砦ノ姿ニ取立運上蔵等造築追々大港ニ相成候様人種

其地へ令屯集候様仕度候事

- 一 ⑧山海ノ村々此又小砦等取立頭立重立候者配住右へ分附ノ足輕中間相繼令居住産業又ハ開墾等便宜引立時々長役ヨリ見廻リ勸懲相加可申事
- 一 支配長役ハ不及申惣テ開墾骨折候者共子孫永續封縣之姿ニ相成候様御仕向下被爲遊候テハ人氣着實不仕開墾之勵無之候間其段分配之國元ニテ相心得候様屹度定制段仰出度様奉存候事
- 一 分配之諸大名ヨリ公儀へ被相預候上東北海諸國諸藩之町々へ建札仕浪人始百姓町人等有志之面々其外困窮暮兼候者ヨリ乞食非人ニ至迄不限男女蝦夷地へ渡り度候ハ、其日ヨリ御扶助可被成之間何月何日迄何之港へ罷出居候ハ、船ニテ載歸候ノ旨相認惣テ日本地ニテ活計成兼候人種漸々招集蝦夷地へ差遣頭々へ分附産業取立ノ人夫ニ召使婚娶等迄致世話安樂居住候様取計申度事
- 一 日本地ヨリ引連參り候者共ハ寒氣難凌儀ニ付衣類居室ノ手當共一切諸費長役ヨリ相賄追テ産業際立利益相見候ハ、右料年賦ニテ差引取上可申事
- 一 惣テ分配ノ諸大名ヨリ差出候一切ノ諸費并人夫扶助ノ雜費等産業得益ノ上三分ノ割合ニテ運上金相納候外追々差引此又年賦ニテ相償候様仕度事
- 一 此度御開荒ニ就テハ元來蝦夷地松前家ヨリ御引上ノ御趣意屹度相心得⑨此迄松前家ヨリ町下請負人共へ任置其名ハ介抱ト唱テ實ハ銘々ノ利益ノミ相考聊モ開荒ノ所業無之却テ漁獵ニ差支候逆墾田坏及禁止候様ノ儀ニ相成候テハ御引上ノ詮モ無之且北門ノ鎖鑰警衛ノ御本意ニモ相背候條開荒分配ノ諸大名へ精々被仰渡候様仕度事
- 一 右開荒大様ノ規模荒々認取候得共右ハ其地へ罷越候上上次第二工夫相考申度儀ニテ一定取極候儀ニ無之應變之取計種々可有之歟ト相考罷在候併初之内ハ松前家仕來之通土人ト漁獵之産物交易仕候儀專要ニ有之就テハ⑩土人引立海底之諸産昆布始雜草雜物刈取又ハ漁獵等之便利ニモ相成候様心附及候〔I〕愚考ノ水器御試相願度猶⑪此上金銀鑛掘立牛馬育方一切地方ノ産業ニ便利相成候品相考申度萬一蒙大命候得者乍不及粉骨碎身愚者ノ千慮夫々相試御開荒ノ埋草ニモ相成候様心懸申度奉存候事

右通計貳拾六箇條爲心懸認置候事

辰正月（安政三年）

多田彌太郎¹⁸⁾

まず初めに、蝦夷地開拓に際し、〔I〕～〔III〕「愚考ノ〇〇」と表現されている、産業および軍事に資する自らの発明品の試行を出願している点に注目すべきであろう。

〔I〕「愚考ノ輸柱船（＝水器）」については、傍線①によると、蝦夷海の海上で漁業および運輸業に利用される船舶であり、その船舶を製造して試行することを出願している。また傍線⑦では、その船舶は漁業だけでなく軍事にも用いられ、一湊につき二、三艘ずつ配備する計画であり、大きな「割合」をかけてその経費を捻出するのである。

ここでの「割合」とは、傍線②によると、蝦夷地における産業上の利益を、蝦夷地に配置された大名

18) 多田信編『成仁集』第2編（1890年）所収「關蝦夷策條目」

の国元への運上金、蝦夷地の産業および交易にかかる諸経費、支配下にある移民各々の所得として三分割され、さらに、その三分ともに開墾にかかる経費として、それぞれ「割合」を除き置くことである。また、それは幕府主導のもと推進されており、利益を優先した諸大名による開拓事業の非効率性を考慮した結果であった。

しかし、そうした幕府主導の開拓事業が実施される前の当分の間、アイヌとの漁業産物の交易に専念すべきであり、傍線⑩によると、この船舶は、アイヌによる海底の雑草雑物の刈取および漁業にとって便利になるように配慮されてもいる。

〔Ⅱ〕「愚考ノ新砲」については、傍線⑤によると、開墾等が盛んになって利益を上げるようになると、「頭立重立候者」にその兵器を一挺ずつ製造させ、さらに一年に一度ずつ広野に集会させ、陸戦の操練等を試行することを出願しており、それは非常事態に備えて防衛に心掛けることに目的があった。

ここでの「頭立重立候者」とは、傍線③によると、開墾のため内地から招集された移民およびアイヌのうち、人材登用によって「士分農兵ノ姿」に取り立てられた、リーダーとして重きをなす者たちを指しており、傍線④および傍線⑧では、彼らは山海の村々の小砦に配置され、彼らの従者ということで足軽中間に取り立てられ、「家人ノ姿」に仕立てられた者たちとともに居住する計画であった。

〔Ⅲ〕「愚考ノ砲船」については、傍線⑥によると、先述した新砲により陸戦の操練を試行した上で、さらに蓄財の余慶がある場合、数名の協力のもとその兵器を製造させ、海軍の操練を試行することを出願している。ただし、その砲種の鑄造料に経費がかかるため、幾らかの「割合」をかけてその経費を捻出する計画であった。

次に、最後の条にある傍線⑪によると、既に海庵が考案した〔Ⅰ〕～〔Ⅲ〕の発明品に加え、海庵は今後、鉱業や畜産業をはじめとした地方の産業に便利となる製品を考えたいと表明している。また、そうした発明品の試行によって開拓事業を前進させるよう心掛けるとしている。

ところで、海庵が上記のように蝦夷地開拓について献策する契機となったのは、寛政期以降、幕府が蝦夷地を直轄し、開拓の端緒的試みを行なったことが背景にある。それは北方ロシアに対する警戒と箱館開港による国際的影響への対処が主眼であり、すなわち対外的な動機によるものであった。しかし、先ほどの傍線⑪における海庵の決意表明をみると、維新以後の北海道開拓の主要な動機となる、近代化のための富源の獲得と開発に繋がる思考が「鉱業」への着目という視点から窺われる。

さらに、上記の〔Ⅰ〕～〔Ⅲ〕が導入される開拓計画の全体を俯瞰すると、近代における北海道開拓の幾つかの特徴が見受けられる。それは、明治期の北海道開拓事業が、政府がリードする国家主導型で進められた点と、先住民であるアイヌに対して徹底した同化政策を行なった点において確認できよう。

国家主導型の開拓事業については、〔Ⅰ〕の計画で見られた、諸大名主導の開拓事業の非効率性の指摘だけでなく、傍線⑨では、幕府が継承する松前藩の蝦夷地経営、すなわち商人に経営権を委ねた場所請負制度が漁業を含めた狩猟の障碍となり、さらに開墾を禁止するまでに至っていることを問題視している。つまり、海庵は大名や商人といった自己利益に規定される小さな経営主体ではなく、市場や採算に左右されない強大な中央権力による蝦夷地経営を望んでいるのである。一方、アイヌに対する同化政策については、〔Ⅱ〕の計画で見られた、人材登用を通してアイヌを「士分農兵ノ姿」および「家人ノ姿」に仕立てるように、外見から同化を求めている点に特徴があり、国土防衛への意識と並行する形で、近

代特有の民族観も芽生え始めている。

最後に、〔IV〕「北極出地」についていえば、これは〔I〕～〔III〕のように海庵自らの発明品ではないが、北極星の位置をもとに緯度を計測し、地図上の数値を求める作業を指している。こうした比較的新しい天文学の技術により、東アジア地域における正確な地理認識が得ることが可能となっており、それにより開拓計画の立案がなされている点に注目すべきであろう。

5 土岐鋭雄への献策

次に、出石藩に自らの政治意見を表明したものとして、海庵が文久2（1862）年に土岐鋭雄〔後の仙石政固〕に献策した意見書を取り上げたい。これは焼失することなく完全な形で収められている。以下は、海庵の子信の説明文も含めその全文である。

先人遺著ノ勤王ノ事ニ關スルハ報國十議三器衍義等十余部ノ書トス而シテ王政復スヘキノ意見ヲ記セル書類ノ如キハ遭難ノ際故ニ之ヲ火中ニ投シタリ左ノ一書ハ舊主ニ奉呈シタル書類ノ一ニシテ幸ニ筐底ニ存ス是ニ由テ推考スルニ當時眼中徳川幕府ナク王師起ルアレハ為ス所アラントスルノ企圖ヲ窺フヘキナリ書中御家トアルハ仙石家ニシテ尊公様ハ舊主仙石政固君ヲ云フナリ

不肖信識

今度蒙御赦免候ニ付報効之寸志左ニ奉申陳候

遠望十策

- 第一策 國難鎮定ノ大謀者已ニ御成功此上所願老尊公様御韜晦恭己富強之策優遊御經書士民鎮撫國祚恢復之御志業悠々積年曆而御貫通アラセラレタク奉願候事
- 第二策 私事此上者御家ニ對シ奉ツリ尊諭遵奉何事モ十分韜晦唯々願之上上京縲綽中ノ著書奉備叡覽就而尊公様御英名ヲ天聰ニ達シ奉リタキ事
- 第三策 田中河内介始義舉ノ面々ト交ヲ結ヒ、就而薩長諸藩ヘ志ヲ通シ御家勤王ノ本意ヲ内達致シ置キ、且ツ我藩奸黨再發ノ機ヲ冥々ノ中ニ差押ヘ後患ナカラシメタキ事
- 第四策 本願寺引受ノ蝦夷地ヲ御家ニ申受開荒仕リタク右地開荒ノ支配私蒙命候ヘハ不費御國用經當仕リタキ事
- 第五策 大阪ノ豪商加島屋作二郎ヘ蝦夷地開荒運輸ノ用ヲ達スル大船製造ノ組立ヲ頼ミ込タキ事
- 第六策 滯京時々世上ノ新聞ヲ御家ニ達シ奉ツリ時機ヲ熟視シテ寸策ヲ献シタキ事
- 第七策 今度昇進之權中納言島津和泉殿ヘ万一此上以勅旨征夷大將軍ノ職ヲ命セラル、時ハ内謁ヲ請ヒ寸策ヲ奏シ尊皇攘夷ノ大謀ヲ輔翼周旋致シタキ事
- 第八策 海岸ノ地悉ク列侯ヘ分配諸士土着セシムルノ策ヲ献シ但馬國海岸美含二方二郡ノ地御家ニ附屬ノ朝命ヲ願ヒタキ事
- 第九策 天下事變ノ機ニ應シテ万一諸国鼎沸瓜分之勢ヲ爲シ候ヘハ密奏内願綸旨ヲ申受ケ義兵ヲ舉ケテ但馬全國ヲ鎮撫シ此迄幕鎮ノ地ヲ御家ニ附屬セシメ尊公様ヘ但馬之守護職タルヘキ

旨 禁裡ヨリ補任有之様周旋致シタキ事

第十策 但馬國ノ守護職タル上ハ兵ヲ師イテ丹波丹後等ノ 皇命に叛ク列侯ヲ征討シ直ニ上京禁闕
ヲ守護シ奉ツリ御家永ク京都北面ノ藩鎮トナリ沿海ノ大藩ト比肩一方ノ干城トナルヘキ大
業ヲ尊公様へ御勸メ申上タキ事

右十策ノ内第一策ハ已ニ其端ヲ啓キ畢ンヌ餘ノ九策モ追テ成功臨機應變小出入有之候共大略ノ規模
ヲ外サス々々志業ヲ遂ケ度ト存込候但シ天祐神助ト其身ノ壽夭ハ智力ノ窺ヒ知ルヘキ所ニ無之且孰
レモ年曆ヲ積ミ日月ヲ費ヤシ事ノ品ニ寄優游機ヲ待チ候事ニテ其内敬ノ一字ヲ終身之一大至寶トシ
テ或ハ韜晦如愚或ハ活動乗機龍蟄豹變進退不測膽ヲ九天ノ上ニ揚ケ心ヲ九地ノ下ニ潜メ必志ヲ達ス
ヘキト念力神明ニ誓ヒ候條豫メ申上置奉仰御英察候尤機密之大事奉申上候迄モ無御座候得共御緘黙
奉願候事

文久壬戌十二月五日

立德盥嗽敬白¹⁹⁾

まず初めに、出石藩仙石家が実行すべき政策判断として、第四策の傍線部にあるように、「本願寺」が担当している蝦夷地経営を引き受け、蝦夷地の開拓事業に関与することを提案している点に注目すべきであろう。

ここでの「本願寺」による引受とは、本願寺の家臣松井中務を中心とした蝦夷地開拓計画を指している²⁰⁾。嘉永6（1853）年ペリーが浦賀に来航すると、松井は、蝦夷地は我国の「北門ノ鎖鑰」であるから、箱館に本宗の寺院を建て、王法為本の宗旨を説いて現地民衆を教化すべきことを本山に建議した。安政4（1857）年になり幕府が蝦夷地の開教を公許すると、松井は蝦夷地を開拓して屯田兵を置き、蝦夷地の物産を京都に輸入し、その利潤によって開拓費用を充たそうと画策、本山に請い、自ら進んで開墾御用係となっている。実際、松井は本山家臣を蝦夷地に派遣し、上記の計画で得た利潤を開拓だけでなく、兵備の資本や町民の所得にも充てている。

つまり、海庵と競合関係にある本願寺の家臣松井に代わり、海庵が蝦夷地開拓事業の責任者となれば、出石藩仙石家の藩財政から出費せずに経営してみせるというのである。蝦夷地経営に対する海庵の自信の高さが窺われる。

では、出石藩が蝦夷地の開拓事業に関与する場合、その責任者となる海庵の経営手法としては、どのような特色が見られるのであろうか。第五策の傍線部によると、出石藩の信用を背景として大坂の豪商「加島屋作二郎」からの融資を引き出し、前章でみた海庵自らの発明品である「輸柱船」の製造ラインを構築する構想が予想できる。

ちなみに、「加島屋作二郎」とは、堂島米市場の入替両替・大名貸資本として代表的な豪商加島屋作兵衛の文化5（1808）年における分家であり、入替両替・高松藩宇出津米売支配を勤め、大名貸をし、大

19) 多田信編『成仁集』第2編（1890年）所収「遠望十策」

20) 岩田真美「幕末期本願寺における勤王家の家臣——松井中務について——」（『本願寺史料研究所報』第40号、2010年）参照。

坂の箱館産物会所用達として知られている²¹⁾。

したがって、自ら考案した蝦夷海に適した産業・軍事兼用の船舶製造を蝦夷交易に精通した金融資本と結びつける経営手法であり、技術導入によって産業に貢献しようとする点にその個性が窺われる。

次に、出石藩以外の行政機構が実行すべき政策判断についてどのように考えているのであろうか。第八策の傍線部によると、朝廷に対して海岸の地に悉く諸大名を分配して藩士を土着させることを念頭に置いて、出石藩仙石家に対して他領に属する美含郡および二方郡の計二郡を出石藩仙石家に属させる朝命を出願することを提案している。

これらの提案は、軍事力に勝る諸藩が近隣の幕領の海岸防備をも担うことに主眼があろうが、そうした国家意思の決定は、幕府ではなく朝廷によって担われている点に注目すべきであろう。一方、幕府に対しては、第七策の傍線部によると、薩摩藩主島津和泉家が将軍となった場合に献策し、「尊王攘夷ノ大謀」を手助けしたいと考えている。

しかし、実際には、第三策の傍線部における出石出身の「田中河内介」が寺田屋騒動に関与して薩摩藩の手によって殺害されているように²²⁾、薩摩藩政の実権を握っていた島津久光の脳裏には、海庵が待望する尊王攘夷ではなく公武合体があった。それにも関わらず、第六策の傍線部では、京都の政局を見極めながら出石藩の針路を導こうとする海庵の強い意思が窺われる。海庵は尊王攘夷を主目的としながら、出石藩と朝廷に対して、場合によっては幕府に対して自らの政治意見を表明するのである。

最後に、これら十策の策略を遂げる際の心掛けとして、海庵が結論部分の傍線部において、「敬」の一字を最上の宝とする姿勢を挙げている点は、海庵の思想実践を支える通念如何という観点から注目すべきであろう。

6 姉小路公知および学習院への献策

最後に、朝廷に自らの政治意見を表明したのものとして、海庵が文久3（1863）年に姉小路公知および学習院に献策した意見書を取り上げたい。しかし、実際に上書された封事、著書、地図等は収められていない。そこで、文久3（1863）年時点における海庵の手記と思われる史料〔題名不明〕を取り上げ、史料上に窺われる幾つかの献策内容を検討したい。以下は、その全文である。

皇国内外之憂近年來遂日切迫是ニ於テ

叡慮斷然攘夷之令ヲ下シ玉ヒシカハ①言路忽チ開通シテ草莽之危言ト雖トモ

上徳ニ達シ

21) 加島屋の事業展開については、『国史大辞典』第3巻（吉川弘文館、1983年）282頁。

22) 田中河内介〔文化12（1815）年～文久2（1862）年〕は但馬国出石の医者小森信古の子。出石藩儒井上静軒・京儒山本亡洋に学ぶ。亡羊の推挙で中山忠能に召し出され、同家家臣田中綏長の婿養子となる。同家用人として庶務や中山忠愛・忠光の教育を担当。また、明治天皇養育の御用掛となる。ペリー来航後、国事につき中山忠能に種々献策、他方、志士とも交際。文久元（1861）年中山家を致仕し尊攘運動に専心。寺田屋騒動で薩摩藩に捕らわれ、鹿児島への護送船上で殺された。

廟議ヲ助ケ奉ツルコトヲ得ルニ至ル賤愚立德カ如キ者ト雖トモ亦聊建白之旨アリ去ヌル四月上京〔I〕封事及ヒ年來著ハス所ノ書ヲ學習院ニ上ツル其後姉小路宰相中將殿攝海巡見之 勅使トシテ下向シ玉フ時御供之列ニ加ハリ歸後又〔II-1〕一通之封事ヲ中將殿ニ上ツル由ツテ②封事中建白之一條蝦夷開荒之要器ニ供センカ爲メ蒸氣船ニ代用セント愚考之新製輪柱船トイヘル船製造ノ雛形ヲ造ラント欲シ暇ヲ告ケテ但馬國ニ歸リシニ忽チ中將殿横難ニ逢ハセ玉ヒシヲ聞ヒテ再ヒ上京靈墳ニ謁シテ拜吊シ奉ツリ滞留四五日ニシテ歸ル猶③造船之願ヲ遂ケンカ爲メ船工車工ニ命シテ日夜指揮從事之折柄今月廿三日姉小路殿待臣中條右京突然トシテ出石ニ來リ茅屋ヲ訪ヒ告ケテ曰ク去ヌル五月來長州ノ變アルヲ以テ攘夷ノ 勅旨益切迫即チ沿海ノ要地ヲ巡見ノ爲 勅使四方ニ下向中國鎮西ヨリ攝海ノ咽喉ニ至ル迄次第ニ心ヲ用ヒ玉フト雖トモ京師搦手ノ後門トモイフヘキ若狹越前丹後等ノ守備亦忽カセニスヘカラス由ツテ建白ノ上云々ノ内旨ヲ蒙ル敢テ請フ同行巡視形勢ヲ記シテ之ヲ獻言セラレンコトヲ予思フニ造船ノ舉切急心ヲ盡ストイヘトモ 朝廷機要ノ公事速カニ命ヲ奉セシムハアル可ラスト即チ君命ヲ請ヒ許容ヲ得テ同月廿七日右京ト同シク出石ヲ發シ舟程六里川流ヲ下ツテ城崎ノ温泉ニ達シ船工車工ヲ召シテ若越丹海岸巡見ノ内旨ヲ告ク然ルニ船工車工皆曰ク竹ノ濱ニ於テ製スル所ノ船形方ニ成就ニ近カラントス然ルニ④一日指揮ヲ得シテハ新製ノ器械構架ノ法ヲ諳ンセス願クハ船形成就ノ後ヲ待ツテ巡見ノ舉アランコトヲ予モ亦久シク船形ノ速カニ成ランコトヲ希望シ日夜ニ之ヲ責メテ今成功ニ臨ミ手ヲ離ツコト甚タ惜ムヘシ由ツテ右京ト謀リ右京子獨リ巡見シテ予ハ留ツテ速カニ造船之功ヲ終ンコトヲ告ク右京モ亦其言ヲ然リトシテ之ヲ諾シ即刻途ニ就カントス予即チ〔III-1〕嘗テ跋涉スル所若越丹ノ形勢ヲ語り且ツ海防要隘ノ地ヲ指示シ添フルニ地圖ヲ以テシ獻言ノ一助ニ供セシメ総テ右京ノ口頭ニ讓リ形勢諸件ハ筆紙ヲ煩ハサス唯若越丹守備ノ大旨ヲ客舎ノ席上ニ筆シテ巡見ノ責ヲ償フコト左ノ如シ

抑外夷 京師ヲ襲ハントスルノ策ヲ推考スルニ墨夷最モ諸蠻ノ媒タルヲ以幕府ノ奸吏ト親ミ内應ノ便ヲ得テ江戸ノ地ニ占據シ跋扈ノ勢ヲ逞フシテ遙カニ京師ヲ襲フノ体ヲ示シ英佛兩夷ハ淡路ヲ挾ンテ左右ノ兩海門ヨリ闖入シテ攝ニ碇泊直チニ小軍船ヲ以テ神崎淀川等ノ河口ニ遡リ兩夷兩道ニ分レテ上陸砲戰京師ヲ襲フノ勢去ヌル庚申ノ歲英佛二夷清國北京ニ攻入ルノ跡ヲ學ハントスルコトアルヘシ⑤魯夷ハ必同時ニ北海ヨリ若越丹ノ海岸ニ浸入シ後門ヨリ不意ニ出テ、京師ヲ襲ハントスルコトアルヘシ此ノ如ク⑥一時四方ヨリ敵ヲ受ケナハ怯弱無智ノ族一應恐怖ヲ抱キ和ヲ謀ラントスルノ奸謀ヲ企ツル者アルヘシ然レトモ雄藩列侯心ヲ合セテ 禁闕ヲ護シ奉ツリ一點心ヲ動スコトナク勤王ノ精忠至誠天ヲ動カシ時ニ臨ンテ日月ノ錦幟ヲ進メ前後左右破竹ノ勢ヲ向フ所ニ發シ百戰不屈ノ大勇ヲ未戰ノ前ニ練リ玉ハ、毫髮モ内外ノ奸謀ニ陥ルコトアルヘカラス諸夷ヲシテ 皇朝ノ神威ヲ仰カシムルコト決戰必死ノ地ヨリ斡旋シ來ルヘシ加之攝海ニ小砲船ヲ排列シテ烙鉄箭ヲ連射スル愚考ノ海軍ヲ試ミ玉ハ、英佛ノ軍艦百千ノ數ニ至ルトモ一艦モ殘サス燒亡攝海ノ魚腹ニ葬ムルコト案ノ内ニ在ルヘシ論自賛ニ近シト雖トモ⑦軍慮ノ前ニハ強テ辭讓スルコト武略ノ本意ニアラスト〔II-2〕已ニ其大意ハ姉小路贈宰相中將殿ニ供奉攝海巡見歸後建白スル所ノ封事中ニ具スルヲ以テ煩ハシク爰ニ論セス其他墨夷奸吏ト内通シテ跋扈ノ事アラハ之ヲ征伐スルノ略前定セシムハアル可ラス其策已ニ草稿ヲ具シテ密奏セント欲スレトモ未タ其便ヲ得ス機密ノ大謀異日上京ノ日ヲ以テ密

奏建白スヘシ恐レナカラ 叡慮ヲ安ンシ奉ツリ 朝威ヲ復シ奉ツルコトヲ一言ノ下ニ決センコトヲ期シ奉ツル⑧此數件皆必シモ深ク憂ルニ足ラス只憂フヘキハ魯夷逐年浸潤⑨近年刊行ノ中外新報ヲ閱スルニ五六年来八百門ノ大砲ヲ清國ニ鬻キ滿洲黒龍江ノ北地四千余里ヲ一面ニ買取り黒龍江ヲ界トセシニ又江ヨリ南濱ノ地幅六百里長サ二千七百余里ヲ手ニ入レ「カラフト」ヨリ西北我北面ニ當ルノ地悉ク魯夷ノ版圖ニ屬シ【a】〔終ニハ滿洲ヲ席卷シテ朝鮮ヲ手ニ入レ清國ノ後ヲ蠶食スルコト〕必定ナルヘシ且今度買取ル所ノ滿洲ノ地金銀煤鉄産出ノ地不少由ッテ黒龍江ノ港口ニ大市鎮ヲ立ツルノ議アリト云々已ニウルップ島以北ノ諸島寶貨百出ノ由海國圖志ニモ載セタレハ次第ニ垂涎ノ情止ミカタク【b】〔カラフトヨリ始メ蝦夷全地ヲ蠶食シテ終ニハ 皇國ノ全域ヲモ覬覦スルコト〕情状鏡ニカケテ明カナリト知ルヘシ其憂遲キカ如クニシテ實ハ速カニ緩キカ如クニテ實ハ急ナリ果シテ其説ノ如クナル片ハ⑩我國忽チ頭上ニ敵ヲ受ケテ進退彼ノ制ニ從ハサルコトヲ得ス彼且黒龍江ノ大市鎮ヨリ數ケ軍艦ヲ出スコト緩急意ニ應スヘク北海ヲ出沒シテ沼邊ヲ騷カスコト斷絶之期ナカルヘシ⑪仰キ願クハ時機ニ先ッテ遠クハ蝦夷地ヲ開キ北門之鎖鑰ヲ巖ニシ近クハ若越丹之海岸ヲ固守シテ京師ノ後門ヲ閉テ魯夷ノ憂ヲ未然ニ防キ玉ハンコトヲ予嘗テ建言スル鎮國之略京師ヲ以テ天主臺トシ大坂ヲ本丸トシ淡路島ヲ二ノ丸四國ヲ三ノ丸九州ヲ追手ノ外構トシ山陰山陽ハ西郭紀勢參尾ハ南郭其餘東海東山諸國ハ東郭就中關東ハ東郭之一出丸トシ北陸ハ北郭蝦夷地ハ北郭之外構トシ北陸之中敦賀之港ヲ京師後門之通用門トシテ若越丹之諸侯ニ命シ警備尤巖ナラスンハアルヘカラス孫子ニ曰ク出其所不趨趨所其不意是レ兵家ノ大事ニシテ英雄之最心ヲ灑ク所トス太宗門對ニ曰ク朕觀諸兵書無出孫武十三篇無出虛實此二句即チ孫子虛實篇之眼目ニシテ豊臣太閤西征東伐所向無敵百戰百勝ノ功ヲ立ツルモ機密ノ大事偏ヘニ此二句ヲ出テス四國薩州北條等ノ征伐其跡顯著此二句ヲ以テ之ヲ掩フヘシ當今諸蠻之戰略思フニ此一事ヲ以テ機謀ノ要トスルコト必定ナルヘシサレハ襲蠻之詭謀ヲ禦クニハ全實ノ守備ナクンハアルヘカラス虚實篇ニ又云ク攻而必取者攻其所不守也守而必固者守其所不攻也ト是即チ攻守之機略ニシテ其守ヲ論スル所直チニ全實ノ守備ト稱スヘシ惣シテ諸夷暴威ニ誇ルト雖トモ妄ニ有備ノ鋒ニ向ッテ一戰ノ勝チヲ争フコトヲ得ス必ス其所不守ヲ窺フヲ必勝ノ大機ヲ試ミントス然レハ我ニモ早く其攻メマシキト思フ所ヲ守ルコト巖密ニシテ若越丹即チ其地ナルヘシ仰キ願クハ敦賀之津ヲ攝海ヨリモ重ンセラレ其峽海之兩岸東岸ハ越前福井ヲ始メテ同國ノ列侯悉ク砲臺ヲ築キ西岸ハ小濱侯一手ニ命セラレ砲臺ヲ築キ正面ノ港内ニハ彦根侯ニ命シテ砲臺ヲ築カシメラレ坂城ノ警衛ハ御免アルヘシ此ノ如クニ三面ヨリ相挾ンテ夷艦ヲ包打ノ略ヲ講セハ敦賀ノ要門始メテ患ナカルヘシ次ニハ宮津田邊峯山豊岡ヨリ我出石ニ至ル迄各其近海之實備ヲ講シ要阨ノ港ヲ固メテ京師後門之守備稍ク全カルヘシ加之巡見之 勅使ヲ迎ヘテ臺砲試放守備不怠ノ檢察ヲ蒙ラハ孫子虚實之本意ニモ叶フヘク外夷 皇國之虚ヲ窺フノ便ナカルヘシ方今時勢ニ感激シテ賤士ト雖トモ不知所恐遙ニ中條右京ニ託シテ〔Ⅲ-2〕封事ヲ學習院ニ上ツリ 朝廷ノ明察ヲ仰キ奉ツルト云爾

多田立德頓首九拜敬白²³⁾

23) 多田信編『成仁集』第2編（1890年）所収。題名は不明。

海庵の朝廷に対する献策先は、先述したように、少壮尊攘派公家として国事参政に就任した「姉小路公知」もしくは尊攘派の武士・公家の政治的集会場として機能した「学習院」が挙げられる。以下、史料上で確認できる全ての献策を献策時期の早い順に並べておく。それぞれ、左から献策先、献策形式、献策内容を示している。

〔Ⅰ〕：文久3（1863）年4月

学習院、封事と著書、不明

〔Ⅱ-1〕および〔Ⅱ-2〕：文久3（1863）年4月

姉小路公知、封事、蝦夷開荒之要器と武略ノ本意他（「撰海防禦意見書」）

〔Ⅲ-1〕および〔Ⅲ-2〕：文久3（1863）年7月

学習院、封事と地図、若越丹守備ノ大旨

上記の献策のうち、史料の量的関係から、学習院に対する献策Ⅲ「若越丹守備ノ大旨」を中心に検討するが、それ以外にも、姉小路公知に対する献策Ⅱ「蝦夷開荒之要器」と「武略ノ本意」について、その推測できる範囲内で簡単に確認しておく。

まず、「蝦夷開荒之要器」についてであるが、傍線②によると、海庵が提供する要器として、第四章でみた「愚考之新製輪柱船」が見えており、それは蒸気船に代用されるのであるが、姉小路公知に献策Ⅱを渡し終えてすぐ、海庵は故郷但馬に帰ってその船舶の「製造ノ雛形ヲ造ラン」とするのである。

また、傍線③では、この「造船之願」を遂げるため、「船工車工」を日夜指揮し、そうして海庵の部下となった「船工車工」の口から、傍線④「一日指揮ヲ得シテハ新製ノ器械構架ノ法ヲ諳ンセス」とも言わせている。これらの事実を踏まえると、海庵は特殊な技能を用いて自ら考案した船舶の製造ラインを構築しようとしており、もはや机上の学問に従事する学者というよりも世間の実用に情熱を傾ける技術者といえよう。

一方、「武略ノ本意」についてであるが、傍線⑦によると、「軍慮ノ前」の時点において「強テ辞讓スル」という行為は「武略ノ本意」ではないというのが、海庵による軍事行動上の戦略であった。実際、列強による京都襲撃の対応策として、傍線⑥にあるように、恐怖心による身内からの和議の試みが問題視され、その克服策として、戦時に入る前の「大勇」の重要性を指摘している。

さて、本題となる学習院に対する献策Ⅲ「若越丹守備ノ大旨」の内容を検討したい。献策Ⅲ「若越丹守備ノ大旨」は、〔Ⅲ-1〕の傍線部によると、「巡見ノ責ヲ償フ」という動機によって海庵が作成したものである。ここでの「巡見」とは、攘夷決行の勅旨が迫るなか、出石出身の「中條右京」が京師搦手の

後門ともいべき若狭越前丹後等の守備を疎かにすべきではないと考え²⁴⁾、朝廷に建白して内旨を得たうえで、同地を巡見して形勢を記録し再度献言する、という計画を指している。海庵は「船工車工」との「造船之願」を優先するため、上記の形勢諸件については、献言の一助として地図を添えつつ、その総てを右京の口頭に譲ったが、海庵自ら唯一の封事として「若越丹守備ノ大旨」の作成し、それを右京に託したのである。

この「若越丹守備ノ大旨」の全体構成についていえば、まず初めに、海庵は、列強の国別でみた京都襲撃の策略を説明し、そこから、それぞれの対応策を説明するという体裁を採っている。具体的な列強国として、アメリカ・イギリス・フランス・ロシアが挙げられるが、イギリスおよびフランスについては、アロー戦争における軍事行動を踏まえ、一つの軍事集団として捉えられている。したがって、海庵は、それぞれ、アメリカ・イギリスおよびフランス・ロシアの計三パターンに分けて検討している。

次に、傍線⑧によると、海庵は、アメリカ・イギリスおよびフランスの今後予想される軍事行動に対しては「必シモ深く憂ルニ足ラス」とするのに対し、ロシアのそれに対しては「憂フヘキ」と評している²⁵⁾。この評価は、献策仲介者である右京が、日本海を挟んでロシアに対峙する「若狭越前丹後」の守備の重要性を訴えることもあり、その趣旨に沿ったものとして当然の結果かもしれないが、その憂えるべきロシアの軍事行動、すなわち「逐年浸潤」について、海庵はどのように理解していたのであろうか。

結論からいえば、それは資源獲得に導かれた列強の侵略原理によって理解されていた。傍線⑨によると、海庵は当時刊行された「中外新報」の情報から、ロシアが清とのアイゲン条約（1858年）によってアムール川以北をロシア領とし、さらに同じく清との北京条約（1860年）によって沿海州をロシア領とした事実を掴んでおり、さらに海庵は、括弧【a】によると、満洲、さらに朝鮮を手に入れて「清國ノ後」を侵略する進路を予想している²⁶⁾。一方、括弧【b】によると、カラフト、さらに蝦夷地、終には本土全域という別の進路をも予想している。

では、海庵は具体的にどのような情報を駆使して上記の進路を予想するのであろうか。それは同じく傍線⑨によると、海庵は先述した「中外新報」の情報から「今度買取ル所ノ滿洲ノ地金銀煤鉄産出ノ地不少由ッテ黒龍江ノ港口ニ大市鎮ヲ立ツル」すなわち、ロシアによる鉱業利権の獲得を目的とした満洲経営や、それに応じたウラジオストク建設を把握し、一方「海國圖志」の情報から、「ウルップ島以北（1855年の日露和親条約によりロシアが領有）ノ諸島寶貨百出」と判断した結果、括弧【b】で見られた

24) 中条右京〔天保14（1843）年～文久3（1863）年〕は出石藩士吉村重国の子。文久2（1862）年上京して押小路家に仕え、間もなく姉小路家に転じ、中条右京の名を賜る。姉小路公知が暗殺された時に防戦する。生野の変に加わり、敗れて長州に逃れる途中、銃弾を受けて自決する。

25) イギリスおよびフランスの今後予想される軍事行動に対しては、「攝海ニ小砲船ヲ排列シテ烙鉄箭ヲ連射スル愚考ノ海軍ヲ試ミ玉ハ、英佛ノ軍艦百千ノ數ニ至ルトモ一艦モ殘サス焼亡攝海ノ魚腹ニ葬ルコト案ノ内ニ在ルヘシ」として、第四章でみた海庵の発明品である「砲船」を排列した海軍によって撃退可能としている。

26) 「中外新報」は、安政元（1854）年アメリカ人医師マクゴワンが、キリスト教普及のため寧波で発行した華字新聞。江戸幕府では中国情勢を知る必要から、洋書調所が同5（1858）年から文久元（1861）年までの応思理版から宗教記事を削除のうえ句読点を付して翻刻し、『(官板) 中外新報』と題して発売した。発売の年次は不詳だが、文久2（1862）年頃とされている。

ロシアの進路を予想するのである²⁷⁾。ちなみに、括弧【a】において海庵が予想したロシアの進路は近代以降現実のものとなって明治日本の脅威となっている。

以上の進路予想を踏まえ、海庵が危惧するロシアの軍事行動は、傍線⑩によると、括弧【b】の進路によって日本の「頭上」に敵を受け、さらに括弧【a】の進路によって「北海」に軍艦が派遣される事態であり、ロシアによる京都襲撃の策略である傍線⑤で述べたように、そうした「同時」攻撃から始まり、その後、「北海」から「若越丹ノ海岸」に侵入して「京師」を襲撃するのである。

こうした資源獲得に導かれたロシアの二方面軍事作戦、すなわち括弧【a】の進路上にある「北海」および括弧【b】の進路上にある「頭上」からの攻撃に備えて、傍線⑪において「仰キ願ハクハ」との言辞から始まり、「北海」からの攻撃に対しては、「近クハ」として、「若越丹之海岸ヲ固守シテ京師ノ後門ヲ閉」めることが提案され、「頭上」からの攻撃に対しては、「遠クハ」として、「蝦夷地ヲ開キ北門之鎖鑰ヲ巖ニ」することが提案されている。したがって、故郷出石を含む若越丹における海岸防備と蝦夷地開拓は、海庵にとっては一体のものとして捉えられ、その全てはロシアの資源獲得に導かれた軍事行動に備えての対応策であったといえよう。

このように、最新の国際情勢と正確な地理認識を介して自らの海防意識を構築する海庵は、姉小路公知や学習院を通して朝廷に献策し続け、長州藩同様に攘夷決行の勅旨を待ち望んでいたが、それが実現した暁には、傍線①にあるように、「言路忽チ開通シテ草芽之危言ト雖トモ上徳ニ達」する思いでいた。中井竹山が自らの著書『草芽危言』を松平定信に献じてから、まさに七十年余の年月が過ぎていた。

おわりに

本稿では、儒教と政策との親和性如何という問題を念頭に置いて、但馬国出石藩士多田海庵を考察対象として取り上げた。海庵は武士身分出身の学者でありながら、幕末の〈実務家〉として活躍したが、それは信濃国松代藩士佐久間象山にも共通する。

海庵についていえば、私塾泊園書院の都講になる等、その学問の中心に儒教があった可能性が高い。そこで、本稿では、幕末の〈実務家〉としての儒者の一事例として、海庵の政治実践に注目し、現実社会に対する現状認識に接近することにした。

海庵の政治実践の考察するに当たって、出石藩における〈実務家〉としての儒者の嚆矢とされる祖父桜井東門の日記から、東門と海庵との間における教説の違いを確認し、一方、のちに帝国大学総長となる加藤弘之の海庵評から、共通する修学歴とともに、連続する側面に注目し、これにより桜井東門と加藤弘之の中間世代に位置する多田海庵という人物の位置づけを明らかにした。また、東門と海庵の学問上の相違は、解決すべき社会的課題の変質によるものと想定するに至った。

27) 「海國圖志」は、清国で刊行された世界地理書。原著者はアメリカ人ブリッジマン。清人魏源が編集し、天保13（1842）年に刊行。嘉永5（1852）年増補。日本への船載は嘉永4（1851）年が最初。翌年紅葉山文庫などに入る。アヘン戦争での清国の敗戦が世界事情に無知であったことを反省して編集されるに至る。ちなみに、安政4（1857）年、頼三樹三郎が『海國図志印度国部』を町奉行所に納本している。

海庵の前半生を端的に言えば、泊園書院に始まり様々な学統学派の人士と交わりつつ遊学生活に明け暮れていたといつてよい。その点において、東西の学問を幅広く受容した象山との共通点が見出せる。一方、海庵の著述および献策に注目すると、頼三樹三郎の活動にも共通することだが、ペリー来航を起点として政治意見の表明が質・量ともに発展・拡大し、幕府・出石藩・朝廷の三つの行政機構に自らの政治意見を表明する等、過激なまでの政治運動を展開するところに海庵の個性が窺われる。

しかし、本稿で取り上げた幕府・出石藩・朝廷に対する三つの意見書を見る限り、海庵の過激なまでの政治運動は観念的なイデオロギーによってのみ突き動かされたものではなく、それは緻密な計算にもとづくものであった。また、姉小路公知に対して蝦夷地開拓で使用される「輪柱船」に関する献策をし終えたのち、すぐさま故郷但馬に帰り、海庵を頼りにする「船工車工」を日夜指揮しつつ、「造船之願」を果たそうとするところは、もはや机上の学問に従事する学者というよりも世間の実用に情熱を傾ける技術者といつてよい。以下、献策内容を個別に概観したい。

まず、幕府の徳川斉昭に対して、蝦夷地開拓に際し、「輪柱船」「新砲」「砲船」といった産業および軍事に資する自らの発明品の試行を出願しているのは、技術導入を基本とした殖産興業政策によって国家の存立を保持する姿勢に繋がる発想であり、最後の条で述べた鉱業に資する製品を発明しようとする意欲は「近代化」という観点から注目に値する。

次に、出石藩の土岐鋭雄に対して、自らが責任者となって出石藩が蝦夷地の開拓事業に関与することを提案しているのは、蝦夷地経営に対する自身の高さを窺うことができ、「輪柱船」による技術導入によって産業に貢献しようとするところに海庵の個性が窺われる。

最後に、学習院に対して、故郷出石を含む若越丹の海岸防備を訴えるに当たって、それを蝦夷地開拓と一体のものとして捉えており、迎え撃つ敵国ロシアの侵略経路を西洋人の手による華字新聞と世界地理書の情報を駆使して予想している。そこで、海庵が資源獲得に支配された列強の侵略原理を捉えているのは、明治期の政策目標となる富国强兵路線の構想の出处を考えるに当たって注目に値する。

以上のように、海庵は当時の政局に左右されながら、出石藩政を越えて幕府や朝廷にまで、自らの政治意見を表明している。それらの意見書には、蝦夷地経営に関するものが多く見られたが、海庵にとって蝦夷地経営は、自らの海防意識によって導き出された一手段に過ぎなかったであろう。つまり、海庵は最新の国際情勢および正確な地理認識を介して自らの海防意識を構築し、それにより蝦夷地を含め日本全土を視野に入れた防衛政策を立案していたように思われる。

このように、海庵は、幕末において、国土防衛を念頭に置きながら辺境地の殖産事業に尽力した人材といえるが、その精神は、近代になってからもその命脈を失うものでなかったのではなかろうか。なぜなら、そうした辺境地の殖産事業に加えて、現地で教育活動に従事する形態を採りながら、次世代の泊園書院出身者に引き継がれているからである²⁸⁾。ここに、近代へと連続する〈実務家〉としての儒者の様

28) 泊園書院出身者のうち、幕末維新期に最も活動的であったとされる天保生まれの人物を抽出したところ、開拓者精神に富んだ人物が多く見られ、海外居住者の多くは現地で教育に従事したことが明らかとなっている。その代表的な人物として、東京日日新聞の主筆として活躍した後、中国各地に病院を設けた同仁会や、上海の東亜同文書院を設立した岸田吟香、前半生は樺太探検と北海道開拓に取り組み、後半生は台湾総督府国語学校教授、私立神田中学校校長となり、斯文会初代書記ともなった岡本韋庵、北海道開拓使を経て岡山県勝北郡長となり、日本原（津山市）の

相を確認することができ、儒教と政策との親和性を想起させる重要な事実であるといえよう。

最後に、上記の泊園書院と〈実務家〉との関係について付言しておきたい。それは、本稿で取り上げた海庵と同様に、藩校弘道館にて桜井石門に学び、かつ、泊園書院にて藤澤東咳に学んだ、堀田省軒と島村弘堂という出石藩士についてである²⁹⁾。省軒についていえば、泊園塾の塾規を作る等、泊園書院の人材養成機能を考えるうえで注目すべき人物である。また、省軒と弘堂の両者は、ともに出石藩の勘定奉行に就任し、さらに維新时期になると、省軒は大参事、弘堂は小参事として当時の藩主仙石政固を補佐している。つまり、海庵が文久3（1863）年の生野の変によって倒れた後、維新时期になってから海庵と同世代の泊園書院出身者が出石藩政の中枢を担うに至っている。ここでも、上記と同様に近代へと連続する〈実務家〉としての儒者の様相が見出せるかもしれない。今後の課題としたい。

開拓に業績を挙げた安達清風がいる。ちなみに、海庵は文政後期の生まれであり、この天保世代の一つ上の世代に属している。拙稿「幕末維新时期大阪における私塾の一側面——摂津国旧藩主の社会的活動周辺から見る泊園書院・懐徳堂・梅花社——」（関西大学大学院東アジア文化研究科・『東アジア文化交渉研究』、第6号）350,351頁参照。

29) 堀田省軒および島村弘堂の略歴については、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下巻（吉川弘文館、1970年）966,967頁。省軒については、吾妻重二『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所、2010年）に影印される『菁莪録』にその略伝が収められている。